

---

# 機動魔導師リリカルなのはサーガ

風間ハヤテ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動魔導師リリカルなのはサーガ

### 【Nコード】

N3990L

### 【作者名】

風間ハヤテ

### 【あらすじ】

初めての宇宙間移動をしようとしていた少女「なのは」は、その宇宙ステーションにてグノーシスの襲撃にあつてしまう。フェレットになった少年を助けたその時、手にしたデバイス「レイジングハート」と共に混迷していく世界へと引き込まれていく。

リリカルなのはのSFファンタジー。魔法と機動の融合作品。

翻訳＋無双と共にあげてしまった。ブログ「霧の国の風来坊」もよろしく！

## 第1話「それは運命的な出会いなの？」

太陽が眩しいほどに輝き、暑さがこの町を覆っている。

エアーの音を出して閉まるバスのドア。いつも少女が乗っている私立聖祥大附属小学校行きのバスではない。

一学期が終わり夏休みへと入った少女は今、この星から旅立とうとしていた。

軽く揺れているバスから外を眺める。いつもと違う風景とこれから一人で大移動するという緊張に少し胸がドキドキしている。

「次は終点海鳴宇宙ステーション前」

録音された声がバスに響く、その言葉に窓から前を見る少女。

「わぁ！」

と、小さく驚きの声をあげてしまう、前方には巨大な一本の筒状のモノが空へと昇っている。遠くからでは細く見えたそれは思っていた以上の大きさだった。

ステーションに着いてバスを降り、入り口へと向かう。こんなに人がいたんだと思うほどに人が溢れている

「えーっと、あったあった。お父さんの話では3番エレベーターが分かり易いんだっけ？」

案内板をポチポチと押して、ここからの道を探している少女。すると画面の中から

「やあ、ボクはこのステーションの案内マスコット「うーくん」だ

よ。お嬢さんのお名前を聞かせてね！」

と案内用のプログラムが浮かんで来た。自己AIを搭載したそれは少女に話しかける

「わたし？ わたしはなのは。高町なのはだよ！」

なのはが案内プログラムに自己紹介した時より数日遡る

喫茶翠屋はいま休業中だ。なぜなのは以外の家族がこの星に居ないからだ。

母と姉がまず用事で地球に行った。その後緊急の事で父と兄がどこかの星へ行かなければならない事になった。なのはを連れて行くかどうかで話している。

この二人は前の二人とは違う場所へいくのだ。それも少し危険が伴う場所に

ちょうど遊びに来ていたなのはの友達のアリサ・バニングスと月村すずかがその話を聞いて会話に加わる

「なら、なのはがわたし達の所に泊まれば良いのよ」

まあそれでも少し問題はあったのだけれども、終業式が近いこともありその案に賛成した

夏休みに入ればなのはも地球へ行くことになった

遠出のそれは小学生には厳しいようだが、今の時勢、隣の星に買い物に行く子もいるぐらいだ、今の所安全面は大丈夫。

そして、終業式を向かえ、なのはが地球へ行く便の2日前にアリサとずずかが宇宙へ旅立っていた。

「わたし達が居なくてもちゃんとすんのよ」

「ごめんね、なのはちゃん」

どうやらこの二人も急ぎのようだった。そして2日後月村家のメイドさんにバスまで送って貰った後、なのはは一人で宇宙ステーションへ移動する

ステーション内には数々のエレベーターがあり、なのははその中の3番エレベーターに乗っている

地上から宇宙港まで一直線に昇っていく。高速で昇っているエレベーターの中は驚くほど静かで揺れていない

小さな休憩所のような内部に沢山の家族連れの姿が見える。

その姿を少し羨ましそうに眺めるなのは、やっぱり少し寂しそうだ

そんな人が多いこのエレベーターになのはと同じ様に一人で座っている少年がいる

「あの子わたしと同じくらいかな？それにあの服、こちら辺ではあまり見ないね？ 旅行者なのかな」

珍しい服を着た少年。少し俯いているため顔はあまりよく見えない。自分と同じような子が居る事に安堵し、なのはは自分の携帯を弄くり出す

待ち受けは友達4人と去年撮った写真だ。なのは、アリサ、ずずか、そしてフェイトが写っている

「フェイトちゃんがお引越しをしてからもう一年か」

幼稚園からの友達だったフェイトの突然の引越し。いっぱい遊んで最後に自分の髪留めをプレゼントした時の写真だ。フェイトからももらった髪留めを今も大事に使用している

最初はちよくちよく連絡を貰っていたのだが、今ではビデオレターで連絡している。そのため頻度はあまり多くない

携帯で暇つぶしをしていたらどうやら着いたようだ、地上から宇宙港まで数分で移動するエレベーター。到着した所は下とはまた違う趣だ

人の流れの少し外側を歩いているなのは、そのまま宇宙船へと向かっていくと”ブーブー”と音が鳴り、目の前に急に何かが出てきた

「にゃっ！　びっくりした」

急な出来事に驚いて尻餅をつくなのは、目の前に現れたのは緊急用のホログラムだ。足元には出現場所を示す赤いランプがついている  
なのはが立ち上がると放送が流れる

「――港内にいるお客様は、係員、案内板の指示に従って避難をお願いします」

急の出来事に辺りの人たちも騒ぎ出し、なのはが聞き取れたのはそれだけだった。ふと近くにあった窓から外を眺めてみる、すると少し遠くの人が叫ぶ

「グ、グノースだ!？」

その一言に辺りはパニックになる。なのはの目にも何かが空間から

現れる様子が見てとれた

我先にと非常口に向かう乗客達、エレベーターは一度下に向かってしまったので使えない。

あまりの出来事に呆然とその様子を眺めていると、その流れとは違う方向へ向かう人影が見えた

先ほど一緒のエレベーターに乗っていた少年だ。

「あつ、そつちは違うよ!？」

その声はこの騒ぎの中、少年へと届かない  
自分と同じ状況だろうと思っていた少年がみんなとは違う所へ行ってしまった事に、なのはは少年を追いかけることにした

「はあはあ、まさかこんなに早く来るなんて」

民族衣装の少年が少し焦りながら叫ぶ。グノーシスの襲撃は多少予測していたようだ

「フィールドの形成は出来る？」

少年がビー玉の様な物に語りかける。

《今の貴方の魔力量では数メートルが限界です》  
淡々と現状を報告するビー玉

「くつ、なら魔力ダメージでなんとかするしか」

そういいながら心を落ち着かせる。自分は近距離用しか攻撃方法を持っていない。捕縛なら何とか出来るが今の状況で一匹二匹を捕まえていても意味が無い

辺りに爆発音や兵器の機動音が鳴り響く、目には見えているが虚数空間に存在するグノース相手には物理攻撃では効果がない。

そのため、実数空間に固定する領域を展開するのが通常の対処の仕方だ。

しかし、このステーションの領域発生のも核が偶然グノースに破壊されている。そのためステーション宙域を賄える量の領域が開けずにいる

避難場所や主要領域のみに展開された状況、つまりその中に入ったグノースに対してのみ戦える今の現状は、圧倒的物量で押し寄せてくるグノースに対してあまりにも弱い反撃だった

壁を物ともせずに入ってくるグノース。少年の前には中型が2対いる。一体をチェインバインドで縛り、もう一体を倒そうと攻撃を仕掛けてみる

今までの日夜を問わずの探索やとある物の封印などで集中力を失っていた少年の攻撃はいともたやすくかわされる

そして、反撃を受けてしまう。地面を転がり曲がり角の壁に激突する。防御服「バリアジャケット」を展開しているとはいえ。少なくとも魔法では衝撃を吸収しきれない

「ぐあつ」

その一撃でバインドの効果が途切れてしまい開放されるもう一体。少し距離が開いたが2体ともゆっくりとこちらに向かってくる

「な……なんとか逃げない」と

そう言い、自分の魔力と体力を必要最低限で行動できるモードに変

化する。小さくなったそれはフェレットに似た形であった

「え……あれ、男の子がフェレットに？」

その光景を見ていた少女がいた。曲がり角まで吹き飛ばされたことで少女が見えるようになった

「ここは危ない！ 早く逃げて！」

ダメージの残る体に鞭を入れ、少女を逃がそうと努力する。しかし少女が少年？を見捨てることは出来なかった

「あつ、あつ」

少女がフェレットを抱き上げ、ふと曲がり角を見みるとそこにはグノーシス2体が近づいてくるのがわかった

「うにゃー……！」

つと叫び声をあげつつ、少女は逃げ出した

しかし、日常とは違う現状と運動が少し苦手な少女はおもいつきり転んでしまう。

そこに真上からすり抜けて来た小型のグノーシスが襲い掛かる

《プロテクション》

少女に当たりそうになった攻撃を膜が防ぐ。

「へっ」

「すごい」

デバイスが強制的に発動させた防御魔法「プロテクション」。

少女の魔力を使用した防御膜がそのまま小型種を弾き返す

マスター認定もリンカーコアに接続もしていない少女の魔力では最低レベルの防御になるはずなのにそれはグノーシスにダメージを与えるほど強固なものだった

「この子なら」とフェレットの少年が少女に話しかける

「君には資質があります。お願い力を貸して」

「資質？」

「詳しくは後で、それより急がないとまた襲ってきます」

「にやっ、えーっと何をすれば」

「これを」

少年が持っていたビー玉型のデバイス「レイジングハート」を少女に手渡す

「それをもってボクの言う通りに繰り返して」

「……うん」

「我使命を受けし者なり」

少女が言葉を繰り返す

「契約の下その力を解き放て」

言葉を紡ぐと、デバイスが鼓動を鳴らす

「風は空に星は天に」

その鼓動がどんどん大きくなって

「そして不屈の心はこの胸に」

暖かな力が少女を包み込む

「この手に魔法をレイジングハートセットアップ」

そして遂に光臨する

流れ出でる魔力の奔流を受けて、近づいていたグノーシス2体が吹き飛ぶ。その力の発現に辺り一帯のグノーシスが一時止まったほどだ

「イメージして君の魔法を制御する杖を、そして君の身を守る強い衣服の姿を！」

想像する。自分の身を守る物と、魔法の杖を。そして、そのイメージ通りの姿を現す

「成功だ！」

「えっえっ、うそぉ」

いつの間にか想像していた服を着て杖を手に使っていたのは。何が起きたのか分からないのは、目がグルグルだ

## 第2話「更なる力、機動なの」

いつの間にか魔法少女へと変わっていた少女。高町なのはは現状をあまり理解していなかった

覚醒の魔力で吹き飛ばされた2体がまたなのはたちに襲い掛かろうとしている

「えっとこれはどうすれば」

魔法少女っぽい格好になってはいたけど一つも魔法は知らない

「スフィアを形成して！」

「スフィアって何？」

「魔力の玉みたいなものです、レイジングハートに登録してある「デイバインシューター」を起動するよう願って」

祈祷型デバイスは使用者の願いで魔法が発動するように設定してある。その魔法を強くイメージ出来れば出来るほど発動時間や威力などに変化が起きる

「っ出来た！」

たった2つだけではあったが人生初の魔法が成功した。

「それをグノーシスへぶつけて！」

「いつけえーっ」

掛け声と共に飛んでいくスフィア。その攻撃が当たるとグノーシスは弾け飛んだ。その威力は側に吹っ飛んでいた小型種を余波で絶命に追いやるほどだ

「なんかパーンてなったよ今」

「……なんて魔力を込めているんだあの一撃に」

予想外の破壊力に驚く二人。そこにもう一匹が突っ込んでくる

「あぶないっ！」

戦闘慣れしていないのはは、その攻撃に対しての対処の仕方がほとんど分らない、そのためあたふたしている間に回避不可能な距離まで詰められていた。

しかし、なのはに攻撃が当たるかどうかの瀬戸際でこの一匹も弾け飛ぶ。先ほどの2つめのシューターがオートでグノーススを追尾していたようだ。余波は《プロテクション》で防いだ

たった一発でアレほど苦戦したグノーススを容易く屠る少女の魔力にまた驚くフレット。そこになのはが話しかける

「……あれっグノーススって攻撃が効かないんじゃないっけ？」

「魔力ダメージ、通称非殺傷設定魔法は虚数空間にいるグノーススに攻撃を与えることが出来るんだ。」

「普通、虚数空間では魔法の効力は消えるんだけど、グノーススという存在がある場合はなぜか魔法が通るんだ」

「触れた瞬間に実数空間と虚数空間をごちゃ混ぜにしているんじゃないかという説が今の所有力なんだ」

「????」

なのはが首を傾げる。その原理を完全に理解している訳ではないフレットは

「まあ魔法の攻撃が当たるってことだけ覚えておけばいいよ」

とだけ言っておいた

中型を倒し小型のグノーススを余波で退治したが、今は目の前のグノーススの脅威が去っても、まだ危険な状態である。

「早く外に行かないと」

「たぶん僕の持っているものに反応してグノーススが来たんだと思う。この状況を打破する戦力が無いこの場所ではそれをグノースに渡すしか助かる道が無いよ」

と言うフェレット。この外は宇宙だ

「どうやって外に行くの？ 外は宇宙だよ？」

なのは疑問にフェレットが答える

「レイジングハートには転送機能が備わっています。それにはある機体を付けているのでそれに乗って宇宙へ行きます」

今、杖状になっているレイジングハートは高性能品なのだ

ここから宇宙港の出口を目指して走る二人。グノースとは違い外に行くには壁を破壊するか出口からでるしかない

その途中、グノースに捕食されている人や壊された機械などが入る

「あつ、うつ」

小学校三年生になったばかりの少女にはあまりにも強烈な光景だった。そして何とかできるようになった自分がいることも少女の心を締め付けていた

先ほど覚えたデバインシューターを連発し、行き先のグノーススを吹き飛ばす。今、自分がやらないといけないという気持ちが少女を走らせる

ようやく通常の乗客が通るエリアへもどった二人は最短の外への道

を走る。そこはなのはが乗ろうとしていた宇宙船の停船場だ

「あつ、エスカレーターが止まっちゃってる」

「仕方ない、こっちへ！」

エスカレーターを駆け上がっていた二人が次のに乗ろうとしたが、壊されているようだ。エスカレーターを諦め自力で移動する二人そろそろ到着だ

「あつた！ 大きい」

なのはが乗る予定だった船を見つけ、つい眺めてしまう

「あつ、えーつとそういえばキミの名前は？」

「へっ、あつそういえば自己紹介してないね」

「僕はユーノ・スクライアといいます今は魔力節約のためにこの姿でいます。そしてそのデバイスはレイジングハートです」

「わたしは高町なのはです。よろしくね、ユーノ君、レイジングハート」

《はい、よろしく願います》

自己紹介が終わる、そのままほのぼのとした雰囲気には今の状況ではなれない

「じゃあなのは、レイジングハートを通常モードにもどして」

「あ、うんえっと、お願いレイジングハート」

なのはがそういうとレイジングハートは元のビー玉状に戻る。バリアジャケットは展開したままだ

「つぎは？」

「レイジングハートを前に突き出して、固定転送用魔法の起動は僕

「がやるから、なのはは魔力サポートをお願い」

「うん、わかった」

頷き、左手に持ったレイジングハートを前に出す。ユーノが何かを呟くと、なのははから魔力が流れ、目の前の広い空間に大きな円の魔方阵が浮かび上がる

「ッ！ ストライク転送！」

その言葉と共に魔方阵の上に粒子状の光が集まりだす。なのはは魔力光の桜色だ

そして、一つの兵器が目の前に現れる

「おおーすごい」

目の前に現れた白い機体になのはは感嘆の声をあげる。そしてユーノがなのはの肩に上る

「今から、コクピット内に転移するからじっとしててね」

そういうと、レイジングハートが光り輝き、その眩しさに目を閉じたなのは。再び目を開けてみるとそこは、アリサの家で遊んだことのあるシミュレーターとよく似ていた

「その窪みにレイジングハートをセットして」

その窪みはレイジングハートがちょうど収まる程度のもだった、調節されていたであろう窪みにセットする、とレイジングハートから次々と文字が浮かんで消えていく

《調整終了。高町なのはをパイロットとしての認定をしました》

その言葉と同時に、起動音が鳴り響く、少し暗かったコクピット内の計器に明かりがともりだし、どんどん明るくなっていく

「なのはは、こういうの動かしたことがある？」

「ううん、でもアリサちゃん家のゲームでよく似たのはあるよ」

「そっか、とりあえず動かすのに必要なことだけ言うね。まずこの機体「ストライク」はレイジングハートのサポートでほとんど思考型で動くことが出来るんだ」

「思考型？」

「うん、思った通りに動けることを言うんだけど、それだけだと色々問題があつて、それを補うために操作レバーとかがあるんだ」  
「イメージと同じようなマニュアル操作をすることが出来ると両方の弱点を補える機動ができるんだ」

簡易操作講義を少しの間する。思考型以外の動かし方はどうやら大丈夫なようだ、色々なボタンは後でということになった

「じゃあ、いくよレイジングハート！」

《オーケー、マイマスター》

「高町なのは、ストライク！ 発進します」

轟々とスラスターを吹かせて飛び発つストライク。

「で、ユーノ君。これからどうすれば外に出られるの？」

「あの緑色の膜が張ってある所を突っ切って、アレが宇宙港の出入り口だから」

そこへ一直線へ向かうストライク。初めての実践とは思えないほど綺麗に飛んでいく

「あつ」

「なんて数だ」

膜をくぐるとこの宇宙ステーションの現状がよく見える。そこには

夥しいほどのグノーススの群れが存在していた

「……つぐあ、や、やめろ、たすけっ」

「っー！」

オープンチャネルから聞こえてくる悲鳴。ココが今戦場だということの何よりの証明に等しかった

ストライクがビームライフルを放つ……が、グノーススは少し怯んだだけで効果が無かった

「なんで!？」

「なのはレイジングハートを通して魔力をストライクに流し込むんだ。ヒルベルトエフェクトフィールドを張れないのははそれしか効果が無い！」

「でも、それは相当の危険も伴うんだ。魔力を大量に消費するし、グノースス相手ではフィールド内じゃないと期待通りの威力にはならないから」

「それでも!!！」

なのはがストライクに魔力を流し込む。人生初の魔力行使を今日行った彼女には、相当な負担になっていた

「当たってーえっ！」

ビームを連射するなのは、先ほどは一撃で粉みじんに消し飛ばしたグノーススが、一撃食らってもまだ残っていた

「なのはっ！ それじゃ魔力が持たない、スグにココから離れるんだ！」

その言葉がなのはには届いていない。

「あああーっーっ」

叫びながら乱射をするのは、その様子にユーノが気付く。暴走していることに……。

それもそのはず、初めてのグノーシス、初めての魔法、初めての戦場、どれも心に負担が掛かることだ。今まで使ったことの無い魔力に、心の制御が出来なくなっていた

早く何とかしないと、なのはがオーバーヒートを起こしてしまう。今そんな事になればそれは死と同義語なのだ。どうしようか、悩んでいると後ろから何かがぶつかってきた

「うっ」

（まずいつグノーシスカ!?!）

なのはがうめき声をあげ、ユーノが当たったものを確認する。するとそこには青い機体があった

「……艦長!」

「ヒルベルトエフェクト展開!」

いつの間にかそこに存在した宇宙船。名を巡航し級8番艦「アースラ」という。艦長のその言葉と共に、青い球状の魔方陣が広がっていく。

その範囲はステーションとその周囲を補える大きさだ。すると、いままで透けて見えていたグノーシスがしっかりと見えるようになる

「大丈夫か?」

動きが止まったストライクに語りかける青い機体のパイロット「クロノ」。アースラからは他6機の機体が出ている

「なのは大丈夫?」

「?二人乗っているのか」

「あつ、はい、えつとどういえば」

どう話せば良いのか考えているユーノ、なのはは動かない

「まあいい、グノーシスはこちらで対処する。危険だからっ」

言葉を言い終わる前に動くストライク。先ほどまでのなのはは、夢を見ていた。

「あゝまた負けた」

「はっはっは年季が違うのよ年季が」

「むーアリサちゃん大人気ないよ」

「アリサちゃんまだ子供だから」

「ちよつとすずかーなによそれー」

「あはははは」

笑い声が響くシミュレーター室内、万能型のアリサに遠距離型なのはが負けていた

「なのはちゃんは、色々見すぎなんだよね、もう少し必要なものだけを見たら良いんじゃない？」

「そうね、誘導に引っかけりすぎよあんたは」

「そう言っても……」

分かつてはいるがどうすれば良いのかが分からないのは。そこにすずかが

「じゃあさ、逆に全部のものを掴んでみたら」

「ちよつとすずか、そんなこと」

「でもなのはちゃんなら出来るかも」

そして、またゲームを始める。最初は見る物の多さにあたふたしていたなのはが徐々に適応してくる

見える物の情報を全て取り、そこから必要な物を見つけ出すやり方は有功だったようだ

遠距離砲撃の精度が上がってきている。そのためアリサは回避を余儀なくされていた

「ちよっ、なのは急に当たるようになってるじゃない」

「すごいなのはちゃん」

今まで、父親と兄と姉の鍛錬を真近で見っていたなのはにとって、高速で動くものには目が慣れていたので、そのため要らない情報まで取ってしまったのだが

過去最高の激戦を繰り広げるなのはとアリサ、中距離以内ではかなり当たるようになった砲撃にアリサが攻め込めずにいる  
移動の遅い固定砲台にも近いなのはの機体はただ攻撃を放つ。惜しむらくは遠距離砲撃の弾数が少ないことだ

弾が無くなり、一気に間合いを詰めたアリサの攻撃が火を噴く。そしてまたなのはが負けてしまった

「うにゃー」

「なのは凄いじゃない」

「うん、もう少し機体の調整をすればもっと強くなるよ」

その言葉通り、それ以降のゲームではなのはの勝率が上がっていた

（情報の選択、グノーシスの位置、数、危険な状態の機動兵器、ステーションに近いモノ）

半覚醒状態のなのはは、夢で見た通りの行動をとり出す。それに、レイジングハートが追隨する

第2の魔法が発動、補助を目的とした術式「並列思考」。それは、なのはが使っている戦術に良くマッチした。

魔力により擬似演算機の役割を果たす術式に助けられ、なのははその全てを理解する

ストライクが動きビームライフルがその標準を定める

「っなのは！」

「何をする気だ君は！そこは下手したら味方に当たるぞ！」

クロノとユーノが騒ぐ、しかし半覚醒状態のなのはには聞こえていなかった

ビームが疾風る、その数7本。なのはの魔力を上乗せしたそれは、フィールド内で絶対の威力に昇華する。

「っなんだ、今のは」

「助かったのか、オレは……」

「……なんて精密射撃だ」

ストライクの攻撃は7回。倒したグノースは23体。ほぼ一撃で3体以上を貫いたことになる

敵を狙ったと言うより、隙間を通したと言う方が適切だと感じるほど。綺麗にグノースだけに当たっていた

「すごいね、あの機体の人」

アースラのオペレーター「エイミィ」が褒める

「そうね、……けど」

艦長「リンディ」がその人物の今の状態を理解する

圧倒的な精密性と威力を示したなのはだったがその7回の砲撃で動きが止まった。魔力の過剰使用によるシャットダウンが起きたのだ

「クロノ執務官！ 予定通り例の物の転移を」

「了解しました」

なのはが気を失った瞬間に、レイジングハートは魔力の遮断およびオートでの機体制御を開始していた  
そして、クロノが前方に何かを転移させた。それは赤く縦長の水晶みたいな形をしていた

ユーノが、アースラになのはの救助を求める、了承し艦内へと促すリンディ。

アースラまでの間、ユーノはグノーススの行動を見ていた。

赤い水晶に群がり、どこかへ運んでいったグノースス。ステーション内部の奴らも次々に外に向かい空間へと消えていく。

（あれはロストログアだ）

グノーススの行動により何を手渡したのかが分かったユーノ。もしかしたらグノーススはそれを追ってココまで来ていたのかもしれない  
彼ら時空管理局の戦艦は、宙域の治安、ロストログアの回収を主な任務にしている組織だ。今の自分の状況に役立つ力はある。

これからのことを考え、まずはなのはの治療が先だと結論付けた。  
アースラに収納され、医務室へと運ばれるなのは

そして、この宙域のグノーシスの襲撃は終わったのだった。

### 第3話「こことは違つお話なの」

なのはがアースラの医務室で治療を受けている時、別の場所とある傭兵達が依頼を受けていた

〃〃室内

「ふう」

キュツキュツと蛇口を捻りシャワーを止める

赤い髪の少女はバスタオルを体に巻き、髪を少し乱暴に拭く

風呂場から寝室へと移動した彼女は、そこにある仲間内の専用通信が鳴っている事に気が付く

ネームを見ると、「シグナム」と書かれてあつた

ボタンを押す、すると前方にウィンドウが展開される

「なんだヴィータ、風呂にでも入っていたのか」

「シグナム、どうしたんだこんな時間に」

手にした、牛乳を飲みながらヴィータが問いかける

「……今更、カルシウムを摂っても遅いんじゃないか？」

「ぶっ」

その言葉に軽く咳き込む

「げほっげほっ、シグナムてめえ」

「ははは、すまない、あつそうだ」

「新しい依頼を受けたぞ」

悪びれた様子も無く続けるシグナム。それを半目で睨みつつベット

に寝転ぶ

「ふ〜んでそれは」

「喜ベヴィータ。目出度くお前一人で遂行する事になった」

「っ！　なんだよそれ」

ベットから起き上がり真正面から睨むヴィータ

「シグナム、お前が取ったんだろう、それにザフィーラやシャマルは？」

ヴィータが他の仲間の名を言う。彼女たち4人の総称は「ヴォルケンリッター」

「ザフィーラは私と共に護衛任務の延長だ、最近色々ときな臭くなってきたからな。シャマルは相変わらず音信不通だ」

「……またか」

ヴォルケンリッター「シャマル」は補助系魔法のエキスパートだ。彼女のデバイス「クラールヴィント」は遠距離の星間でさえリアルタイムで通信を行えるほどの高性能品。

そのため、通常の通信機器類を持ち運ぶことをあまり、というか全然しない彼女であった

シャマルからの通信ならどこにいても通じるが、こちらからの通信は通常の機器や念話のため、距離や場所によってはシャマルまで届かない場合が多々あるのだ

「直させるよ、リーダーだろ」

「アレは無理だ、あいつの料理ぐらい無理だ」

何気にひどいことを言う

「はあ、であたしは何をすれば良いんだ？」

「ああ……依頼内容は少女の奪還。ある所から生きて連れ出すことだ……見方によっては誘拐だな。ははは」

「ますます睨むヴィータ。「そう睨むな」「睨んでねーです」とのやり取りの後」

「依頼人は「ギル・グレアム」。管理局のお偉いさんだった奴だな。彼の友人だった八神という人物がある研究所に行ったのを境に消息が掴めなくなったらしい」

「そして、調べていくうちにその人物が死亡していることが判明。そしてその娘さんがどうやらロストロギアの被験者にされているようだ」

「ロストロギアの名は「闇の書」少女の名前は「八神はやて」。そしてココからが一番重要なのだが」

「その研究所の主がDr・スカリエッティだ」  
その名前を聞いて眉が少し動く。狂科学者として有名な彼は、ヴォルケンリッターの傭兵業と数回ほど衝突したことがある相手だ。その全てが常人では耐えられなさそうな内容だった

「管理局ならとっ捕まえれば良いじゃないか？」

「まあそうなんだが、噂では今、管理局のお偉いさんの一部と繋がりとあるとかなんだとか。シヤマルがいてくれればよかったんだが」

「なら連れて来ても管理局に預けたら意味が無いんじゃないか」  
繋がっているなら本末転倒だな、と思い尋ねる

「連れて行く所は管理局じゃない。ファウンデーションだ。あそこに八神の親友がいるらしい、八神はやてを連れてそこへ向かってくれ」

「……わかった」

「詳細は送ったが届くまで少し時間が掛かりそうだ、じゃあなヴィ

「タ」

「ああ」

ウィンドウが閉じ、静寂が辺りを包み込む。

ヴィータはそのままベットに横になり、目を閉じる

この星の只今の時刻は良い子が寝ている時間帯なのだ

なのはのいた宇宙ステーションのグノース襲撃事件の情報は星から星へと瞬く間に広がっていく

臨時ニュースが伝えたそれは、少女たちにとってあまりにショッキングな事だった

「っ！」

「なのはちゃんっ！」

グノースが襲撃したと思われる時間はちょうどなのはが乗る船の時間帯だ

2人、いやその家族たちにも不安が走る。しかしここはハイパースペース内。ゲートジャンプ時通過する特殊な空間だ。その技術により遠距離の通信などが盛んになった

不安が頭から離れない2人、だけど事件をニュースでしか知られない今、何も出来ないでいた

「……なのは、アリサ、すずか……」

金髪の少女が呟く、目の前には4人で撮った写真がある

つい先ほど来たニユースで、前に住んでいた所がグノーシスに襲われていることがわかった。今はもう沈静化している

ここからでは少し遠い場所にあるため、早急に情報を得る手段が余り無い

手を握り締めている少女「フェイト」。なのは達の安否を気遣いながらそれでも今、自分がやらないといけない事がある彼女は

ゆっくりと部屋から出て行った

アースラに保護されてから3日後。なのはが目を覚ました

「あれ、ここは？」

「あつ、気が付きました？」

アースラの看護スタッフがなのはの状態を見る。ついでに艦長に連絡を入れる

段々と覚醒していくなのは、そして、あの時の事を思い出す

「あ、あの、グノーシスは？ ステーションはどうなりましたかっ？」

少し焦りながら聞くなのは。すると扉が開き

「グノーシスは撤退していったよ、ステーションの被害は3割つてところだ」

「なのはー」

クロノが答える。その下にはフェレットモードのユーノがいた

「ユーノ君！ えとあなたは」

「僕はクロノ・ハラオウン。時空管理局の執務官だ」

「私はエイミィ！よろしくね」

「管理局？」

聞きなれない単語に、首を傾げるなのは。そこにユーノが説明をする

色々と説明され、多少状況が分かってきたなのは。

「うつ、うつ」

「なのは？」

俯きなにか耐えるようにしているなのはを心配するユーノたち、そこに

「はいはい、男性陣はご退場願います」

とエイミィが背中を押して、外に出す

「大丈夫だよ、もう心配しないで良いよ」

なのはの頭をなでそう声をかけると、なのはは堰を切ったように泣き出した

「よしよし、がんばったね」

「うわぁぁー……ん」

暫く泣き声が続き、そしてその後泣き疲れたのか、なのははまた寝てしまっていた

この3日間で自分の事、なのはの事を話していたユーノ。自分達の

失態が招いた事態に少なからず心に影を落としていた

#### 第4話「決意。力を求めてなの」

ロストロギア「ジュエルシード」

ユーノ達、スクライアー族が見つけた発掘品。異世界に存在した高度な技術の遺産のそれは今、なのは目の前にあった

一つ一つが強大な魔力の結晶体でもあるジュエルシードは、抱いた願望を叶える特性を持つ。

探索や調査で名を馳せたスクライアー族は、今回のジュエルシードを船に積み、帰路へ向かう

ロストロギアの危険性を十分承知している彼らは、今回も嚴重な封印と保管をしていた。しかし、ジュエルシードの魔力が解き放たれてしまう

ハイパースペースを航行し道半ばと言う所で、船に異常が起きる。船が大きく揺れる、1度、2度、3度。まるで攻撃されているかのように……

今乗船している人数は10人。その中の一人が慌てて艦長に報告する

「ジュ、ジュエルシードが暴走している!!」

その言葉を最後にウィンドウが閉じる、辺りには濃密な魔力が溢れている

保管室からは離れた艦首でさえ、居るだけで気分が悪くなるほどの濃い魔力になっている。計器は狂い、魔法技術系統の機材はほぼ全滅にまで追いやられた

「うつ、くつ、どうして」

ちょうどその時艦首にいたユーノは、保管室まで走っていた。多少距離が離れてはいるが、10人乗りの宇宙船はたいした大きさではない

それなのに、まるで永遠を走っているかの如く感じてしまう

やっと保管室についたユーノは、そこに3人の仲間が倒れているのを発見する。高密度の魔力に絶えられずに気絶している

この量に数時間いや数十分でもいれば精神に影響がでてもおかしくない

仲間を助けたいが今、全力でレイジングハートと共に防御を張っているため。何も出来ない。出来てもこの中では転移の座標を固定するのは難しい

ジュエルシードの封印をしているはずの所を見る、するとそこでは4つの宝石が光り輝いていた

「まずいつ、連鎖反応を起こしている」

アレだけの魔力量の中心だ。残りの17個の封印もスグに吹き飛び発動してしまうかもしれない

管理が甘かった？ 誰かが意図的に暴走させた？ それとも偶然？

答えは出ない。しかも下手をすれば次元断層すら起きかねない状況。ただただ絶望が襲ってくる

ココにはユーノしかない、他の人たちでは彼ほどの防御魔法の展

開は出来ないためココまで来ることすら不可能だろう

時間が無い、案も無い、どうすれば良いか悩んでいると魔力で吹き飛ばされていた報告書が目に入る

「っそうか！ それなら」

解決法が見つかった。しかしそれはかなりの博打でもある。

「レイジングハート、ごめん耐えて」

そう言いながらジュエルシールドへ向かうユーノ。防御幕がギシギシといやな音を立てる

近づくたびに、いやそこに居るだけで決っていくほどの魔力量、もしこれが攻撃に転化されたらどれほどの被害を生むのだろう

レイジングハートが熱を持ち始める、収束砲の応用で周囲の魔力を防御に変換をしているデバイスは、その圧倒的容量値ギリギリまで使用していた

「着いた」

ユーノが宝石を手に掴む、手が火傷するほどなそれを持ち、願う。

ジュエルシールドの願望を叶える特性を利用する

願いは転移。ココではない世界へ無事に移動することだ

手が焼け、レイジングハートからも嫌な音が鳴り出す。それでも願いを込め続ける。そして

その場から、ジュエルシールド21個とユーノが消えた

ユーノが気が付いた所は公園だった。

早朝の公園、爽やかな青空、少し蒸し暑いほどの気温。気絶する前にあれほどの絶望があったことが夢のような日常がそこにはあった

「っは！ レイジングハートは」

自分のデバイスを確認する。自己修復中状態になっているデバイスに安堵する

「えっここは」

持っている機械を片手で起動させる、もう一方は痛みで使えない。起動させたそれは数多の星を行き調査をするスクライアの必須アイテムの指定座標管理プログラム。平たく言えば宇宙の地図だった

そして場所を確認する、宇宙ステーションがあるためどうやら帰還することは適いそうだ

「よし」っと手をついて立ち上がるうとする、が激痛に襲われ倒れてしまう。あれ程の事があったのだ五体満足でいるのが不思議なほどだ

レイジングハートはユーノが倒れていた時から修復を始めていたようだ。もう少しで完了する、それまで公園の隅で休んでいることにした

修復が終わり暫くして、ユーノ自身もある程度回復したが、問題が起きた。魔力が全快にならないのだ

あの事件で魔力の器官リンカーコアがダメージを負い。回復量、最大魔力量に支障をきたしたのだ

それでも、ココに飛んでいるかもしれないジュエルシードを探すユーノ。昼夜問わず、1ヶ月程探索して見付けたのはたった3個、それも封印はほとんど解けていたがあの暴走した宝石ではなかった

1ヶ月の探索、再封印に力を使ってしまったユーノは、全力とは程遠い力しか残っていなかった

それでも、デバイスの《もうここには無いようです》の言葉に次の在り処を探すため宇宙ステーションへ向かう

そして、そこでグノーシスの襲撃が起こった

グノーシスは、ロストロギアを求める。という法則があることは、ロストロギアを知っている人物全てが知りえる情報である  
ロストロギアを手に入れば何処かへと消えていく。消えていった先は今だ誰も知らない。分かっていることはほとんどない

なのは目の前をグルグルと回っている宝石が、そんな危険な代物だなんて思えなかった。ただ回っている宝石に「こんなおもちゃがあったような」とか思っている

目覚め、心の重荷を吐き出した彼女は、今の状況やこの人たちのことを聞いていた

「で、なのはさん、あなたは地球へ向かうんですね」  
アースラの艦長であるリンディが問う

「あ、はい、お母さんたちの所に行こうとしていたところです」

「うーん、今ココのゲートは使えないから、さてどうしようかしらね」

先ほどの戦いで見せたセンスは欲しいが、泣きじゃくる彼女をモニター越しに見ていたリンディに戦力になって欲しいとはいえなかった今、この艦は危険な状態にあるかもしれない。そのため、一般人をいつまでも置いておくわけには行かなかった

「やっぱり、通常航行と転移を繰り返して他の地球行きのゲートまで行かないといけないんじゃないかな？」

オペレーターのエイミィがそう話す。それしか今の所無さそうだ

「そうねそれでいきましょう。途中ジュエルシードの反応があったら寄ると言うことで」

「了解」

「それで良い、2人とも」

リンディの問いに「はい」と答える2人。そしてなのはが

「あつ、あの」

「はい？」

「わたしに魔法を、戦う力を教えてください！」  
と頼み込んだ。

もし、これから先あのような出来事があっても、何も出来ないでいることはしなくなかった。

あの時でさえもっと早く動いていれば助けられた人がいると考えているのはは、一生懸命頼み込む

「わかったわ。トレーニングルームを貸してあげます。ただし、しっかりと力の意味を学ぶこと良いわね」

「っはい！」

その答えに力いっぱい返事をするなのは。

「僕が教えてあげる。レイジングハートは僕が持っていたものだし、なのはの役に立ちたいから」

そう言っ、教官役を志願するユーノ、彼女を巻き込んでしまったことに対しての責任がそうさせるのであった

そうして、なのはは魔法の特訓を開始するのであった

なのはの特訓メニューは、魔法の制御と中・長距離攻撃に重点を置いていた

慣れない魔法でも、当たれば一撃でグノーシスを消し飛ばし周囲にも影響を与えるほどの魔力量を常に使っていてはどんなに容量が多くてもすぐに枯渇する

威力を制限し精度を高める。

その訓練は、必要以上の魔力を込めていた魔法が適正量へと洗練されていく

10の魔力を使っ、3、4の効果を得ていたなのはの魔法は今、5、6にまで上昇した

まだまだ訓練の余地があるが、その成果はグノーシスを吹き飛ばした時の魔力量の約半分と同じことが出来ることを示していた  
また飛行制御の練習もしている。空を飛ぶことに喜びを感じたなのははその訓練が大好きだった。見る見るうちに上達しデバイス起動なしでの空中機動レベル3までクリアしていた

そして中・長距離攻撃の訓練。その訓練を手伝った武装局員の一人が「非殺傷でもアレは人に当てていいモノではない」と涙を流していた

なのはの上達振りには舌を巻くほどだ。その一端を担っていたのが件のロストロギア・ジュエルシードの存在だった

訓練中に発見した宝石は4つ。その全てをユーノとアースラの援護を受けてなのはは出撃したのだ

回避、防御、移動、攻撃。訓練を思い出し、時に助言を受けながら戦うなのは。ジュエルシードを得た生物ないし植物などはその願望を叶え、強力になり暴走する。

しかし今逢ったそれらの中には、なのはたちの敵になれるものは存在しなかった

増殖する木々には長距離砲「デイベインバスター」。神の破壊者と名づけられた一撃は文字通り圧倒的な力を持ってその通り道のモノを薙ぎ倒す

犬型には最初に覚えた「デイベインシューター」。威力を制御し複数同時に使用できるようになったそれは使い勝手が良い。

更に、同じように見える弾ではあるが一つ一つ威力がまちまちで、相手を牽制する

そんなこんなで、実戦を踏まえてなのはは強くなっていった。

集めたジュエルシードは今、レイジングハート内部に保管されている。アースラに預けていない訳は2つ。

1つはアースラの封印技術がスクライアのそれより下回っていたた

め、もしジュエルシードが封印を破っていたとしたらアースラがあの艦の二の舞になるかも知れない事

2つは誰かがジュエルシードを奪おうとしたら、どこか手の届かない場所にでも転送するように設定した事だ

もう過信はしないと心に誓ったユーノはそう言ってあらゆる問題に対処できるよう努めた

そして、アースラは地球へ行けるゲートのある中継点の人工星まであと少しの所まで来ていた

## 第5話「再開は突然に、もう一人の魔法少女なの」

なのはが訓練を開始してから1ヶ月近く経った

それまで転移と通常航行にて移動していたアースラ。転移にはある程度の距離制限と安全制限があり、長距離転移の連続使用は望ましくない

それでも普通の状態ならそこまで時間は掛からなかった。しかし今この艦の内部には9つのロストロギアが存在するため、下手に刺激をしてグノーシスと呼びたくなかったのである

長距離転移の際、出現場所のステーションにグノーシスの大群がいたことからの予防策であつた

最初にアースラ独自に積んでいたのが3つだったが襲撃事件の時に1つグノーシスに渡さざるおえない状態だったため、今は2つそしてジュエルシードが7つ、計9つのロストロギアがあることになる

そうして、隠密に移動したアースラは中継星まであと少しのところの廃棄星にいた。ジュエルシードの反応が出たからだ

生物が存在しないため、昔、兵器の実験場になっていたその星は一面何もない荒野だった

兵器実験の際の有害物質があるかもしれないという事で今回は機動兵器での探索。

バリアジャケットでも防げることは防げるが、展開に必要な魔力量を上げなくてはならない。さらに、モノによっては全方位型の防御

膜を張らないといけなので効率が悪い

ストライクを動かし荒野を進むのは、その傍らにはフェレットモ  
ードのコーノがいる。

この1ヶ月治療を受けつつなのは教官になっていた彼はある程度  
の回復をしていたが、まだ全快ではなかった

今回の探索に出た機体数は7機、アースラの一般武装局員6機にな  
るのはストライクだ

この星のジュエルシードの数は3つ。2:2:3に別れ、ロストロ  
ギアへと向かう

なのは一番近い場所にあるジュエルシードを目指す。思考型の練  
習も兼ねているため速度は遅い

遠い2つの宝石は、真反対側にあり距離的にはあまり変わらない  
なのはがようやく作戦領域に到達した時、2つの通信が入った。2  
つともジュエルシードの確保の報告だ

「わたしも急がないと」

なのはが呟きジュエルシードを探す。そして見つけて取ろうとした  
時、また通信が入る

「こ、こちら第2班。て、敵対する機体が……」

「こちら1班。囲まれているー!!」

その報告の後、アースラのレーダーから味方機のマークが消える。

搭乗者は緊急帰還転移を作動し、アースラへと帰った。

搭乗者のみを転移させる緊急脱出装置のそれは機体は運べない。ジ  
ュエルシードは機体に格納していたため持ち帰ることは出来なかった

「な、何が起こっているんだ」

「何か来る！」

突然のことに戸惑うが、ストライクのレーダーに急速に近づく1つの反応がある

「ここは俺たちに任せて」

「早く、ジュエルシードを」

なのはと一緒に来ていた局員が前に出る。言われた通りに宝石を確保する

1、2班が同時にやられたのだ、敵は相当数はいる、ゆっくりしていたらアースラも危険な状態になる

「確保しました！」

「よしならつぎ」

なのはの報告を受けたと同時にロック警報が光る、瞬時にそこから離れる3機。つい先ほどまでいた場所に高エネルギーの砲撃が降り注ぐ

その砲撃の威力に少しばかり気を取られた2機は、超高速で迫ってくる敵の事を少しの間見逃してしまう

その隙をついて2機を襲う敵機。1機は何も出来ずに破壊され。もう1機も抵抗するも圧倒的機動力の差で撃破される

気づいた時なのは1機だけだった。砲撃の土煙の中を歩いてくる軽量型の機体。全体を黒く染め、右手には大鎌が装備されている

高速接近戦重視のその見た目に、なのははどう戦うかを模索する  
お得意の遠距離砲撃はできない。ストライクには独自の換装システムがあるが、ユーノが使っていたのはエールストライクのみで、ほかの換装パックは購入していなかった

攻撃を開始する相手、高速で動く機動はアースラの量産型魔導兵器を上回っている、がなのははこの速さには慣れていた

月村すずかの高速戦を体験していたからだ。

彼女は高速での格闘戦を得意とし近距離での機動は一瞬消えたようにも見えるほどだ

似たタイプでの戦いに善戦をしたのではあったが、機体の地力の差が徐々に現れてくる。相手はロストロギア搭載機。そしてパイロットの魔力を上乗せする

ストライクを圧倒的魔力で補った機動だったが、相手の魔力値もなのはには及ばないものかなりの量がある。しかもそれまでの戦いにその魔力をほとんど使用していなかったのだ

追い込まれ一撃を食らってしまうストライク、ユーノがトランスフェイズ装甲という特殊装甲に変更したものであったが高エネルギー、高魔力の融合した大鎌には、物足りないものであった

その一撃で稼動にすら支障をきたすほどにダメージを負ったストライクに、

「ジュエルシードは貰っていきます。怪我をしたくないのならそれを置いて離れてください」

相手は淡々と話しかける。その声は昔よく聞いた声にそっくりだった。

「えっその声、もしかしてフェイトちゃん!？」

「っ!」 な、なのはなの」

驚く2人。突然の再開は奇しくも戦う相手としてだった

「なんで！ フェイトちゃんが機体に」

「なのはこそ」

相手が親友だとわかった2人は動揺する。その動きが機体に現れている。

黒い機体のフェイトが先に立ち直る

「……なのは……ごめん」

眩き鎌をストライクに放つ。相手に緊急帰還転移がある事は先ほどの機体で分かっている

自分がやらなくてはいけない事のために、なのはをこれ以上戦わせないために、親友にはココでリタイアして貰う必要がある

「いや……だよ。こんなの」

その一撃が来るまでの短い間、なのはは今の状況に涙を流し、そして否定をしていた

（こんなの違う、力を求めたのはこんな事のためじゃない、これは違う、違う所なんだ）

無意識に思った願望になのはが今、手に入れたジュエルシードが反応する

急に光り輝く宝石に、誰も対処は出来なかった。その最中に攻撃を食らったストライクは緊急転移を作動させる

光が収まると、ジュエルシードはそこにあった、それを掴み空になったなのはの機体を少しだけ見つめるフェイト。そして何処かへと飛んでいった

「なのはちゃん！」

エイミイが大声でなのは名を呼び、モニターに緊急転移先を表示する

そこに居たのは倒れているフェレットだけだった。

「まったく資料が届くまでに2週間も掛けやがって、しかも郵便で出すって何を考えているんだよ」

赤い髪の少女、ヴィータは愚痴を言いながら宇宙船に乗っている

いつも通り、専用の回線を介して送られてくるものと思っていたが、思いつきりが外れた

資料が示した場所は、自分がいた所よりかなり離れている。しかも通常では行き難い場所にあるため移動方法を探さないとイケなかったその後潜入うんぬんもあり、ここ数日対応に追われていた

「帰ったらぜってえ、ペケる」

あとアイスを大量に奢らせようと誓う

移動にもかなりの時間を食ってしまったため、その暇な間ヴィータはイラついていた

その怒りは大量のお菓子へと消えていった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3990/>

---

機動魔導師リリカルなのはサーガ

2010年10月11日00時39分発行